

特別講演

「いま図書館員として」を聞いて

首藤佳子（会報・会誌編集部）

今研究会では滋賀県立図書館館長、前川恒雄先生に特別講演をお願いした。「いま図書館員として」と題して行われたこの講演は参加者に大きな感銘を与えた。

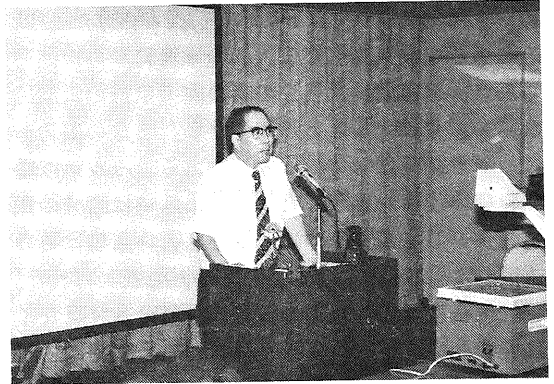
先生は病院図書室についてはあまり詳しくないのですがと前置きをされて本論に入られたが、どの館種の図書館員にも共通する基本的な心構え、職業倫理等について多くの事例を紹介しながら分かりやすくお話くださった。司書としての基礎的な教育を受けていない人の多い病院図書室担当者にとってはまたとないよい学習の機会であった。

ここに簡単にその紹介をしたい。

まず、先生は人のために働くのが図書館員である、そしてその仕事は目立たない地味な仕事であるが、このような仕事こそ本当に大事な仕事であると明言された。これは決して恵まれているとはいえない職場環境の中で毎日コツコツと仕事に携わっている私たちには大きな励ましになった。

図書館員の仕事は一見誰にでもできる仕事と思われがちである。病院でも担当者の置かれている雇用や勤務の状況はこうした図書館員の仕事に対する一般的な評価をよく反映している。しかし、図書館員の仕事は本当はそんな簡単なものではなく、「本をよく知ること」や「利用者についてよく知ること」は決してたやすいことではないと実例を示しながら教えてくださった。

この中で印象深かったのは「本を知っている」ということは単に著者や書名、版元等の書誌的事項を知っているということだけではなく、本（書物）の持つ人間に与える大きな力を知っているか



（講演される前川先生）

どうかということであると説かれ、「利用者を知る」ということは個々の利用者の生活のありようや考え方をよく知ること、つまり「人間」に対する深い洞察力と共感が必要なのだと言われたことである。私たちに引き寄せて考えてみると、提供する文献の質にもっと注意が払われるべきであり、また医療スタッフの向こう側にいる患者さんへももっと思いがよせられるべきなのかもしれない。

また、図書館をとりまく環境、特に図書館にとって決定的な権限を持つ人や機関が必ずしも図書館の仕事の重要性を理解していない現状を述べられ、その打開のために図書館員は多少の勇氣、いくばくかの気概を持つべきではないかと論を進められた。言うべき時に言うべきことをきちんと言う姿勢が必要だということであろう。この当り前のことが現実にはなかなかできにくいことなのである。さらに、図書館員に対する社会的支持を高めるためには他の誰でもない、司書が自ら努力しなければならぬこと、そしてそのことは自分のためばかりでなく、後輩のため、広く社会のためでもあ

るという自信と自覚が必要なのではないかと問いかけられた。ともすれば日々のルーチンワークに埋没し、理念を見失いがちな私たちにとって責任感、使命感を持って仕事をする大切さを教えていただいたのだと思う。

私たち病院で働く図書館員は院内における立場の弱さやその役割に対する無理解にともすれば仕事に対して無力感を持つこともあるが、その点についても先生のお話から勇気を与えられた。図書館員が権力や世俗的な力からもっとも遠いところにある職業の一つであることを前提とされた上で、そのような職業に携わる人間の幸せについて述べられた。図書館員は自分の真の実力以外の世間的な力を頼りにすることができない、自分の実力ははっきり結果として出る職業である。そういう中で自分の仕事をきちんとする、あるいは自分の図書館員としての力を伸ばしていくというのはその人間を本当の意味で鍛え上げるのだと教えられた。一般的には現実的な力の有無が評価の基準になることが多いが、このような視点から考えてみることは私たちにとって新鮮で有益であった。

これらのお話から病院図書館員が陥りがちな現状に甘んじる姿勢や安易な失望感や挫折感が否定され、もっと主体的な図書館員のあり方が示されたと思う。自分の職業を守っていく、自分の仕事に誇りを持つ、立場の弱さを逆転させて自分を鍛える良き場所であると発想の転換をすることは現在の病院図書館員にとってはなかなか難しいことではある。しかし、好むと好まざるとにかかわらず、そういう風にやってみるしか道は開けないように思った。

先生はこの講演の中で最近の機械化の動向についても触れられた。いま図書館業務はどんどん機械化され、業務の中には機械で代行できるものもいくつかある。例えば、貸出や検索にはコンピュータが大活躍をし、図書館にコンピュータの端末が並んでいる光景も珍しくはない。しかし、機械化によるサービスの向上、業務の合理化と引き換えに図書館サービスに必要な人から人へという大事な部分が損なわれる危険性も一方ではある。先生がこの中で強調されたのはコンピュータの導入や利用に際して両刃のやいばの側面を十分考慮する

ように、またコンピュータに使われてしまっはいけない、図書館員は決して主体性を見失ってはいけないということだと理解した。

そして、人と人とのふれ合いの場としてカウンター業務の大切さをお話くださったが、図書館員がキャリアを積み積むほど、また責任のある立場になればなるほど利用者から離れた場所になってしまう日本の図書館の仕組みにはやはり考えさせられた。本当の意味で人を惹きつける図書館は利用者との人間的な関係を大事にする図書館なのだということが理解できたように思う。図書館や図書館員の理念、社会的役割に関する基本的な理解が乏しいまま、一足飛びにコンピュータ化の波に対応せざるを得ない病院図書館員にとっては辛辣なご指摘であったと思う。

最後に、前川先生はマルティン・ルターの「キリスト者の自由」冒頭部分の「キリスト者はすべてのものの上に立つ自由な君主であって、何人にも所属しない。キリスト者はすべてのものに奉仕するしもべであって、何人にも所属する。」という言葉が引用された。この二つの命題は互いに矛盾しているが、図書館員が仕事を行っていく上では重要なことだとされ、独善的に仕事をすることを戒めると同時にまた他に迎合し追従するだけでは真の役割ははたせないと思うと述べられた。

今回の特別講演は私たちが日常的に業務を行っていく上での指針を与えてくださった。日々の仕事の中に「目標」と「楽しみ」を見い出す一つの道を垣間見たような気がした。そしてまた日常業務に追われている私たちがふと自分を振り返る時に私たちを励まし、支えてくれるような気がした。